# 広島県医師会・広島市医師会 令和8年度 被爆伝承事業企画
# 被爆2世医師による被爆伝承手記
# 「被爆者の想いを次世代へ」オープニングセレモニー

## －被爆の記憶を次世代の医療を担う若者の声でつなぐ－

と　き　令和8年8月1日(土)　午後4時
ところ　広島県医師会館　1階　ホワイエ・被爆伝承コーナー






広島県医師会　会　　長　松村　　誠
広島県医師会　副 会 長　玉木　正治
広島県医師会　常任理事　茗荷　浩志
広島県医師会　常任理事　檜山　桂子



手記を寄稿いただいた被爆2世医師および来賓の集合写真

広島県医師会・広島市医師会の共催で広島県医師会館被爆伝承コーナーおよび1階ホワイエにおいて、令和8年度被爆伝承事業企画「被爆2世医師による被爆伝承手記『被爆者の想いを次世代へ』」のオープニングセレモニーを開催した。被爆から81年を迎え、被爆体験を直接語ることのできる方々が少なくなる中、被爆者の家族としてその記憶や想いを受け継ぎ、また医師として被爆者医療に携わってきた被爆2世医師15名に手記を寄稿いただいた。セレモニーでは、主催者・来賓挨拶や企画紹介に続き、寄稿者がそれぞれの想いを語ったほか、医学生や研修医ら若い世代が4編の手記を朗読した。セレモニーには被爆2世医師、来賓、関係者、県民を含む52名が参加した。手記の展示は今後1年程度の常設展示とし、来館者および一般県民へ無料で公開する。

## 開　会

玉木正治広島県医師会副会長および平尾健広島市医師会副会長の司会により開会した。

## 主催者挨拶（概要）



**松村　誠**
**広島県医師会**
**会　長**

今年、広島は被爆81年を迎える。8月6日は、自らも被爆し負傷しながら、多くの医療人が被爆者の救護に献身した、広島の医師にとって決して忘れることのできない原点である。その努力と献身が、今日のヒロシマの医療の礎となった。

被爆者が少なくなり、直接体験を聞く機会が失われつつある今、被爆2世医師は、その体験を直接受け継ぐ最後の世代となっている。本日は医学生と研修医に手記を朗読いただく。被爆者から被爆2世医師、さらには次世代を担う若い医療人へと受け継がれていくことは大変心強い。

命の尊さ、平和の大切さ、核兵器の非人道性を改めて考え、核兵器廃絶を理想で終わらせないためにも、広島県医師会は広島市医師会と共に今後とも被爆伝承活動を続けていく決意である。



**山本　匡**
**広島市医師会**
**会　長**

広島は被爆81年を迎え、被爆者のみならず、その記憶を受け継ぐ被爆2世も高齢化しており、被爆の実相を次世代へ伝承することは喫緊の課題である。そこで広島県医師会と広島市医師会は、被爆者から聞いた体験や平和への思いを記録し発信するため、「被爆2世医師による被爆伝承手記」を企画し、15名の被爆2世医師から貴重な手記が寄せられた。

また、「ヒロシマ医師のカルテ」と「ヒロシマ医師のもう一つの原点」の展示を通じ、原爆投下直後の凄惨な状況下で救護に当たった医師たちの姿や、広島県立医学専門学校の歩みを紹介する。本事業が、被爆者医療の歴史とヒロシマの医療の原点に触れ、命の尊さと平和への願いを再認識し、次世代への継承につながる機会となることを願う。

続いて来賓が紹介され、横田美香広島県知事のメッセージを矢野好輝広島県健康福祉局長が「被爆者の高齢化が進む中、被爆2世医師が家族や医師として受け継いだ記憶を未来へ伝えることは重要である。核兵器を巡る情勢が厳しさを増す今、人類と核兵器は共存できないとの認識のもと、広島県は被爆地として平和の実現と被爆者援護に取り組んでいく」と代読した。

また、松井一實広島市長からは「被爆体験を直接聞く機会が失われつつある今、その記憶と平和への願いを次世代へ確実に継承する必要がある。被爆2世医師の証言を新たな記録として伝え、若い世代が被爆の実相を自分事として捉え、核兵器のない平和な世界について考え行動する契機となることを期待する」と来賓挨拶があった。



来賓挨拶をする松井一實広島市長

## 令和8年度　被爆伝承企画紹介

**茗荷浩志　広島県医師会常任理事**

広島県医師会では、被爆の記憶と平和への願いを未来へつなぐため、令和4年に「被爆伝承コーナー」を開設し、医療の視点から被爆の実相を伝えてきた。被爆81年を迎え、被爆体験を直接語る人が少なくなる中、今年は「被爆2世医師」に着目した。15名の医師が、家族から受け継いだ被爆体験や自身の歩み、被爆者医療に携わった経験、平和への思いを手記につづっている。それぞれの記憶や人生は異なるが、そこには「命を守る」という医師の使命と、「二度と悲劇を繰り返してはならない」という共通の願いがある。被爆者から被爆2世、さらには次の世代へと「記憶のバトン」をつなぎ、本展示が命の尊さと平和の大切さを改めて考える契機となることを願う。

**橋本健吉　広島市医師会常任理事**

広島市医師会では、ヒロシマの医療の原点を伝える二つのパネル展示を行っている。一つは「ヒロシマ医師のカルテ」である。自らも被爆しながら救護に当たった医師たちの姿をはじめ、

原爆後障害への対応、在韓・在米被爆者への支援、核戦争防止を訴える国際的な活動など、被爆者に寄り添い平和を希求してきた広島の医師の歩みを伝える記録である。もう一つは「ヒロシマ医師のもう一つの原点」である。原爆投下前日に疎開した広島県立医学専門学校が、被爆後も高林坊で授業を続け、今日の広島の医療へとつないだ歴史を紹介するものである。二つの展示は、惨禍の中で命と向き合ったヒロシマ医師の記録と、絶望の淵で医療を絶やさず未来へつないだ広島大学医学部の奇跡的な歴史を伝えるものである。



被爆伝承手記パネル




「ヒロシマ医師のカルテ」と「ヒロシマ医師のもう一つの原点」のパネル

## 被爆2世医師による被爆伝承手記の寄稿者から一言

**原田昭先生（原田整形外科病院）**

父は横川で被爆して多くの友人や親族を失い、やり場のない憤りは生涯消えることはなかった。一方で広島県立医学専門学校1期生は疎開により被爆を免れ、広島大学医学部の礎を築いた。父と1期生の生存、そして広島の復興という3つの奇跡があり、今の自分がいる。広島を二度と破壊させてはならない。その思いを次世代へ伝えていきたい。

**柳田実郎先生（呉共済病院）**

広島県医師会で12年間、被爆関係の常任理事を務め、IPPNWやマルセル・ジュノー関連事業、北米・南米の被爆者健康相談等事業などに携わってきた。被爆2世として、これまでの経験と思いを振り返り、県医師会への最後の務めとの気持ちで手記を執筆した。

**隅田伸二先生（隅田耳鼻咽喉科医院）**

今も健在の父母は共に被爆者で、その体験を詳しく聞く機会は少なかった。父の講演会や今回のような企画は、両親の被爆体験を伝承する非常に良い機会だ。今後も積極的に若い医療従事者や子、孫へ体験を語り継ぎ、両親の平和を希求する強い思いを伝えていきたい。

**大澤多美子先生（こころホスピタル草津）**

被爆者の父と被爆を免れた母は対照的な家庭状況の中で育った。英国人教師との文通を通じ、広島の街が復興した一方で、被爆の後遺症に苦しむ人がいるという二面性に気づき、1989年のIPPNW広島大会で医師らの被爆証言を初めて聞いたことを契機に、証言の記録や絵を通じて被爆の実相を伝えてきた。このような機会を与えていただき、感謝する。

**天野純子先生**
**（広島県医師会常任理事／アマノ病院）**

人類が初めて人類に対して使った原子爆弾により、医師を目指していた叔母は14歳で命を奪われた。今回、叔母が生きて生活していた物語を書き、多くの人に伝えられることは遺族としてうれしいことだ。14歳で夢も希望も奪われてしまった叔母の悲劇を二度と繰り返してはならないと、核兵器のない世界の実現を心から願う。

**檜山桂子先生**
**（広島県医師会常任理事／福原医院）**

被爆者の記憶は80年を経ても薄れず、多くの方は悲惨な記憶や生き残ったことへの罪悪感から、被爆の体験を心の奥に封じてきた。しかし、聞くことは酷なことだけではなく、語ることが長年の苦しみを解き放つことにもなり得る。被爆者から直接話を聞ける、残された時間が限られる今、親族の被爆体験に耳を傾けていただきたい。

**岡本太郎先生（岡本クリニック）**

以前は広島市医師会で被爆2世医師の会の担

当理事をしていた。原爆投下のあった8月6日、父は広島市へ向かう予定であったが、電車に乗り遅れたことで被爆を免れた。その偶然があって今の自分が存在している。今後も被爆2世として自分にできる活動を続けていきたいので、ご協力をお願いしたい。

**衣笠隆幸先生（広島精神分析医療クリニック）**

父は被爆直後、爆心地近くで多数の遺体処理に従事し、多くの同僚を失った。その体験を長年語らず、毎年8月、9月は一切仕事ができなかった。父が75歳で初めて私に明かした苦しみと被爆の実相を後世に伝えなければならないと考え、今回の機会に手記として残すことができたことに深く感謝している。

**有田健一先生**
**（広島原爆養護ホーム舟入むつみ園）**

手記を通じて、自らも親の生き方に支えられて親と同じような生き方をしてきたことを自覚した。あの日を生き延びた被爆者の尊厳を守り、生きざまを最も近くで見てきた被爆2世こそが継承者であり、戦争を断固として否定し、核廃絶を訴え続ける揺るぎない礎となっていることを改めて強く感じた。



思いを語る有田健一先生

**高田昇先生（広島市中区十日市）**

母方の伯父と父方の祖父母を原爆で亡くしたが、両親は被爆体験を多くは語らなかった。ベトナム戦争を通じ、われわれも被害者になると同時に加害者にもなり得ることを学んだ。常に「殺す側ではなく殺される側」の視点に立ち、戦争と核兵器を否定し、平和な世界を孫たちへ伝えていきたいと考えている。

**井藤久雄先生（井野口病院）**

母方の一族は広島駅前で被爆し、親族が集まると原爆の話をしていたが、母は「ピカがね…」と言って涙ぐみ、自身の体験をほとんど語らなかった。母は三人の子を育て、人生を全うした。自らの転勤などで十分な親孝行ができなかった思いもあり、今回、母の記憶を残すことが少しでも親孝行になればとの思いで寄稿した。

**松村誠先生**
**（広島県医師会会長／松村循環器・外科医院 湯来まつむらクリニック）**

手記を執筆する中で、在外被爆者健康相談等事業や被爆2世医師の会、IPPNWなどの活動を続けてきた理由に気づいた。ジュノー記念祭での合唱曲で耳にした「あの日の広島を伝えよう」という歌詞を通じ、自らの活動は被爆者である母に導かれ、被爆の記憶を伝える使命につながっていたのだと実感した。今回の手記で自分が何をしているのか、なぜそれをしているのかの理由が分かり、感謝している。

## 被爆伝承手記の朗読

被爆2世医師の先生方より寄稿いただいた15編の手記のうち、4編を研修医ならびに広島大学医学生に朗読いただいた。

「サバイバーズギルト」（難波恒久先生）を広島大学医学部1年生の香川知沙里さんが、「純子叔母の名を継ぐ」（天野純子広島県医師会常任理事）を被爆体験伝承者・初期臨床研修医の井上つぐみ先生が、「原爆を記憶し、次の世代に継承することが私達の平和への闘い」（川越厚先生）を広島大学医学部5年生の吉田侑生さんが、「母が導いてくれた道」（松村誠広島県医師会会長）を広島大学医学部3年生の今井稔梨さんが、それぞれ朗読した。



手記を朗読する広島大学医学部3年生の今井稔梨さん

## 閉　会

平尾健広島市医師会副会長が、「被爆から81年が経過し、体験を直接聞く時代が終わろうとしている今、記憶は人から人へ受け継ぐことで

生き続ける。本日のセレモニーでは被爆体験を語り継ぐ大切さと、平和への願いを未来へつないでいく意義を改めて考える機会となった」と挨拶し、会を締めくくった。

## 担当常任理事コメント

被爆者の高齢化が進む中で、「被爆の記憶の継承」は広島の医療者が果たすべき重要な使命である。その中で今回、被爆2世医師が家族から受け継いだ体験を手記としてまとめ、その想いを未来へ託す企画が実現したことに、担当理事として大変深い感慨を覚えた。医学生や若い医師がその手記を朗読し、声として届けてくれることは、継承の新しい形として大きな意味があり、また医療者としての平和への使命を共有する大切な一歩となった。今後も広島県医師会は広島市医師会と共に、被爆の教訓を確かな形で未来へ継承していく。

（茗荷　浩志）

### 被爆2世医師による被爆伝承手記寄稿者一覧

| | 氏　名 | 手記のタイトル | 所属病院名 |
|---|---|---|---|
| 1 | 難　波　恒　久　先生 | サバイバーズギルト | ヒロシマ平松病院 |
| 2 | 原　田　　昭　先生 | 被爆2世医師による手記 | 原田整形外科病院 |
| 3 | 柳　田　実　郎　先生 | ピカに翻弄された肉親たちとその随想 | 呉共済病院 |
| 4 | 隅　田　伸　二　先生 | 両親から聞いた被爆体験記 | 隅田耳鼻咽喉科医院 |
| 5 | 大　澤　多美子　先生 | ヒロシマの二面性 | こころホスピタル草津 |
| 6 | 天　野　純　子　先生 | 純子叔母の名を継ぐ | アマノ病院 |
| 7 | 檜　山　桂　子　先生 | 消えないけれども話せない記憶 | 福原医院 |
| 8 | 岡　本　太　郎　先生 | 私たちは原爆を忘れつつある | 岡本クリニック |
| 9 | 衣　笠　隆　幸　先生 | 被服廠と被爆した父親のこと | 広島精神分析医療クリニック |
| 10 | 有　田　健　一　先生 | 父の生き方の中で | 広島原爆養護ホーム舟入むつみ園 |
| 11 | 川　越　　厚　先生 | 原爆を記憶し、次の世代に継承することが私達の平和への闘い | 在宅ホスピス研究所パリアン |
| 12 | 松　坂　知　恒　先生 | 八月六日 | 三篠園診療所 |
| 13 | 高　田　　昇　先生 | 人を殺しちゃイケン、人に殺されてもイケン | （広島市中区十日市） |
| 14 | 井　藤　久　雄　先生 | ピカがねー… | 井野口病院 |
| 15 | 松　村　　誠　先生 | 母が導いてくれた道 | 松村循環器・外科医院<br>湯来まつむらクリニック |